

図 9. 岩手・宮城内陸地震震源域周辺の S 波速度偏差分布（東北大学 [課題番号：1207]）。(a) 深さ 24km における平面図。白☆は本震を、小○は余震、赤▲は第四紀火山の位置。(b) 図(a)中 A-A' に沿う鉛直断面図。深さ 35km 付近の線はモホ面。

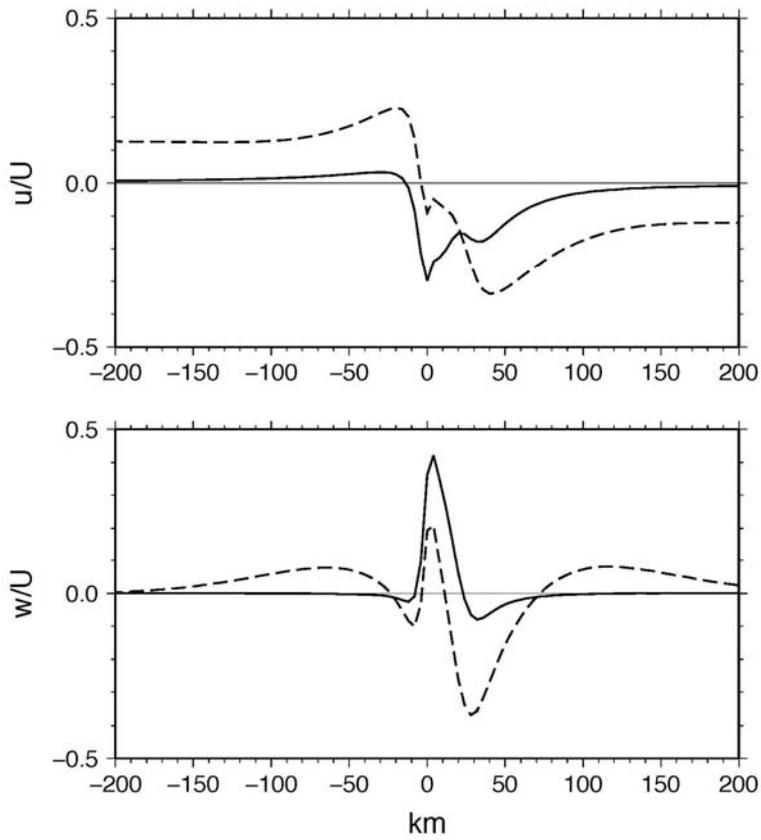


図10. ひずみ集中帯の運動学的モデルによる変形速度分布（名古屋大学 [課題番号：1705]）。
 （上）水平変動分布。実線は断層変位に伴う瞬間的な変化。破線は完全緩和で、一定速度の断層滑りに対する定常解に相当する。（下）上下変動の分布。

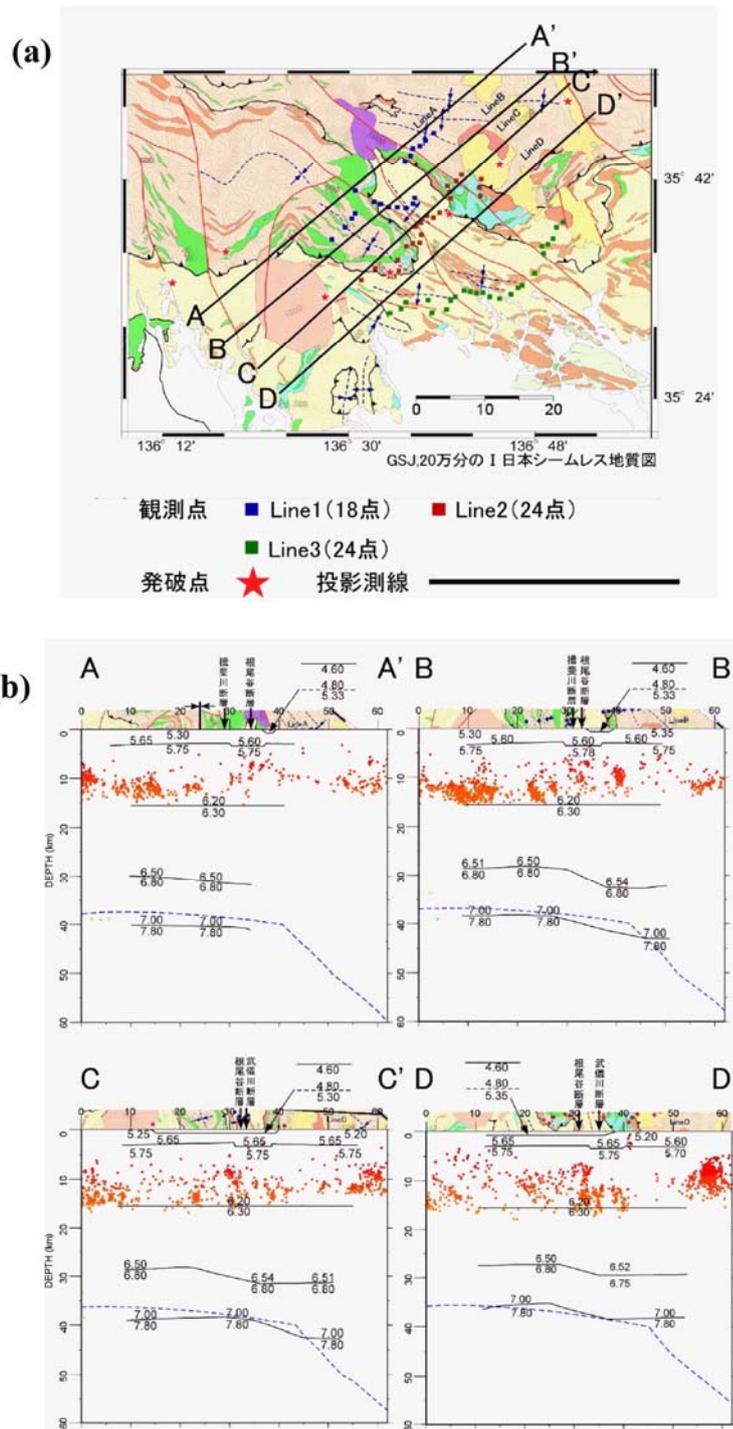


図11. (a) 2009年に実施された構造探査の観測点および発破点分布。地質図は20万分の1日本シームレス地質図(地質調査所)。赤線は断層を示す。(b) 反射波走時から求められた各投影測線での地震波速度構造。青点線は広瀬ほか(2007)によって推定されたこの地域でのフィリピン海プレート上面深度。赤点は気象庁一元化震源(2002年6月10日~2012年8月7日)を示す。根尾谷断層付近を境として北東側の反射面深度が深い傾向がわかる(東京大学地震研究所[課題番号:1417])。

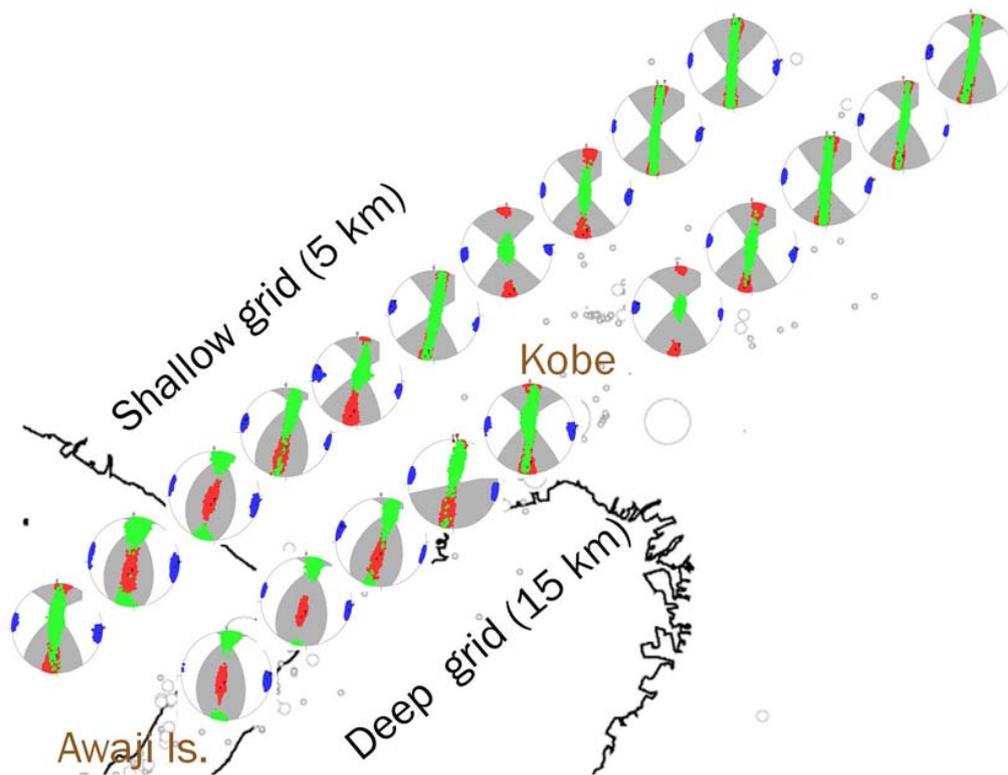


図12. 兵庫県南部地震の余震のメカニズム解からHardebeck and Michael (2006)の応力テンソルインバージョンにより推定された応力場（九州大学 [課題番号：2203]）。各ビーチボールが応力テンソルの結果とboot strap testの結果を示している。青，緑，赤はそれぞれ σ_1 ， σ_2 ， σ_3 の95%信頼範囲。

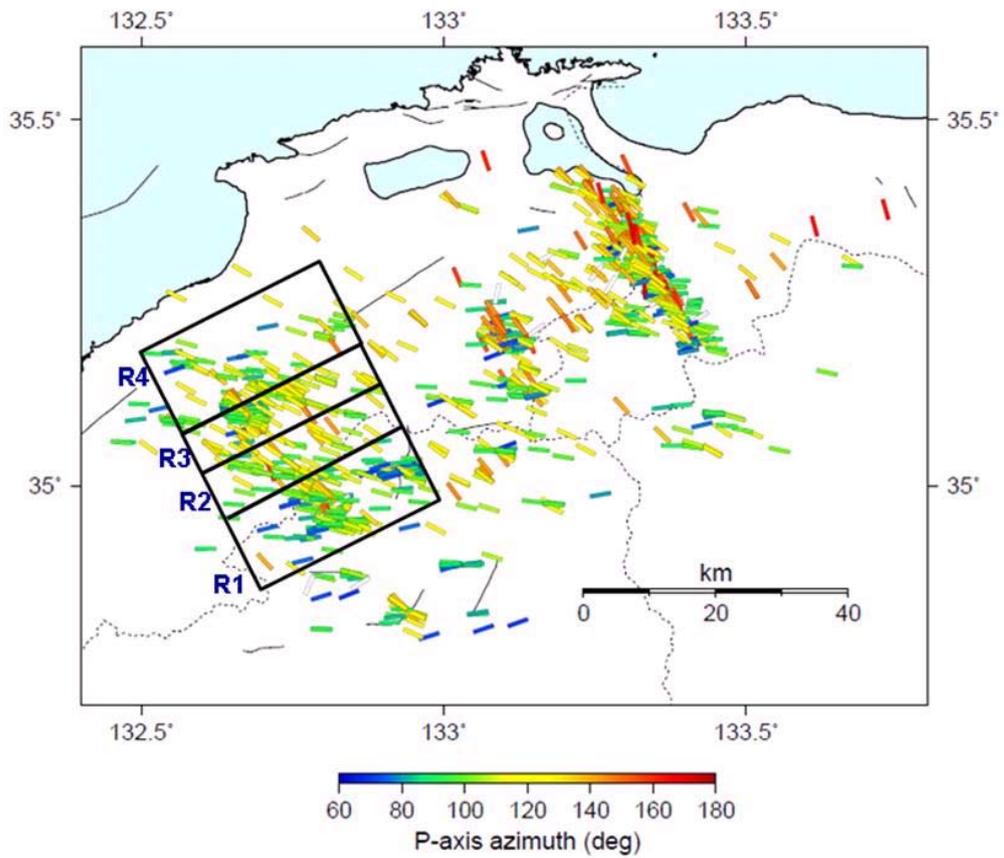


図13. 島根県東部および鳥取県西部におけるメカニズム解のP軸の方位分布と応力逆解析の解析領域（京都大学防災研究所〔課題番号：1808〕）。P軸は2009年11月から2011年10月までのデータを用いて決定。

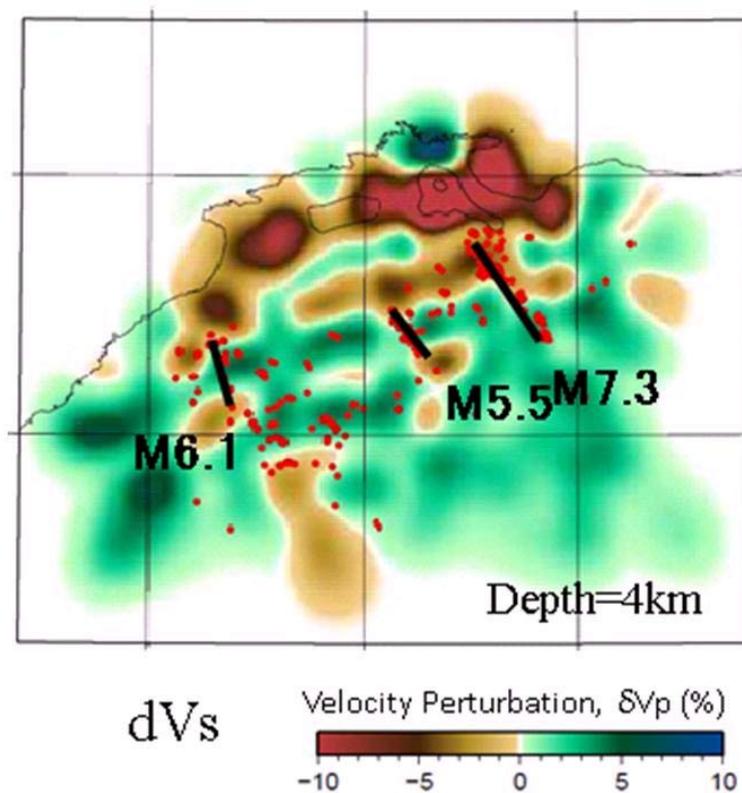


図14. 島根県東部および鳥取県西部における深さ4kmにおけるS波速度偏差（京都大学防災研究所 [課題番号：1808]）。水平断面から深さ0.5km以内の微小地震の震源がプロットされている。

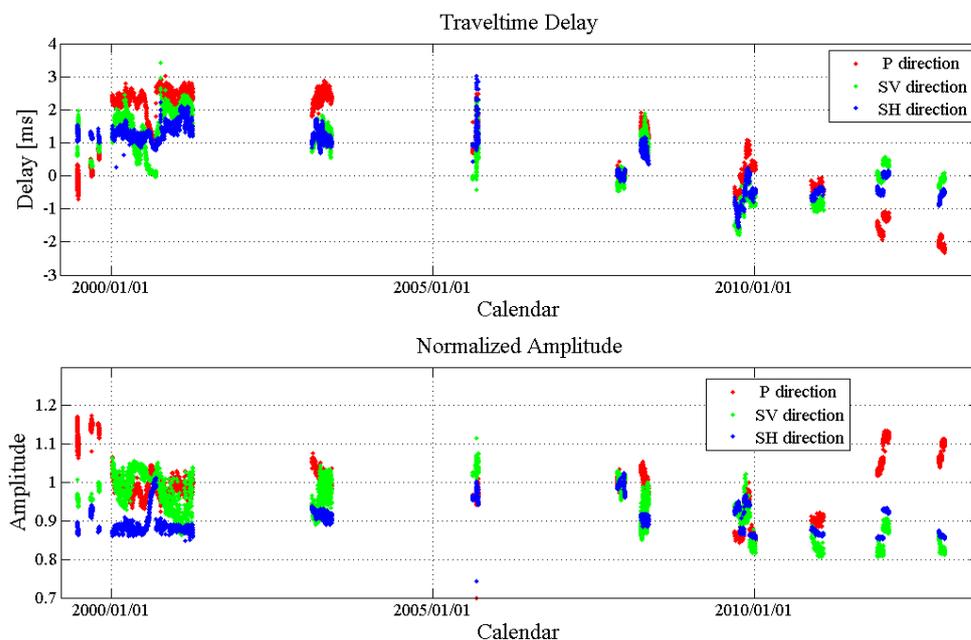


図15. 1999年6月～2013年1月にかけてアクロス連続運転により測定された、野島断層近傍における直達波（P波及びS波）の走時（上）及び振幅（下）の時間変化（京都大学防災研究所 [課題番号：1807]）。いずれも、2008年3月～5月を基準とした走時の遅れと振幅の比を示す。赤，緑，青はそれぞれ，P波，断層に直交するS波，及び断層に平行なS波。

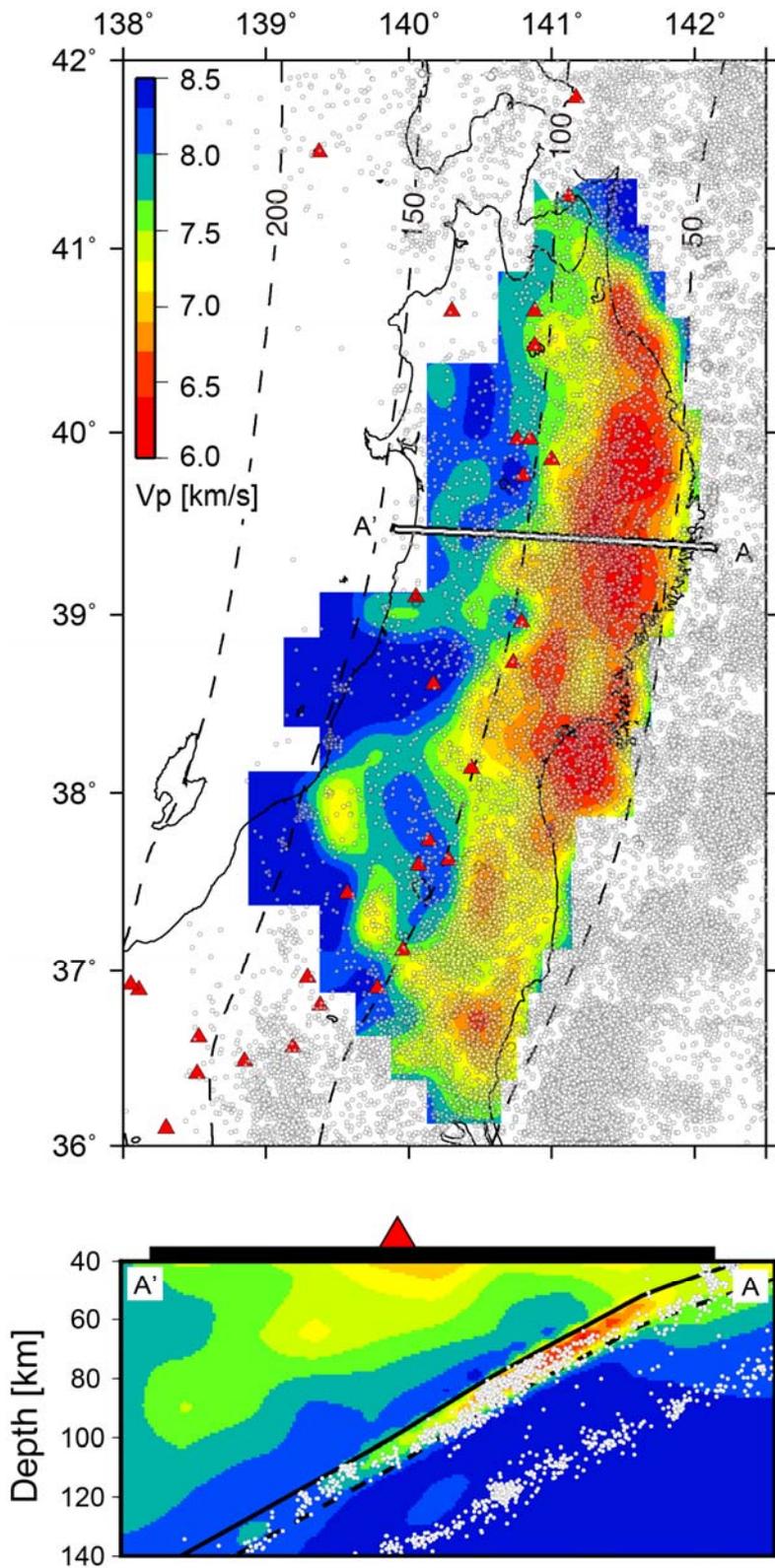


図16. PS変換波により推定された沈み込む海洋性地殻内のP波速度(東北大学[課題番号:1208])。
 (上) PS変換波により推定された海洋性地殻内のP波速度分布。海洋性地殻内で発生している地震(白丸)を重ねて示す。(下) 上図の測線A-A'に沿うP波速度構造の鉛直断面図。

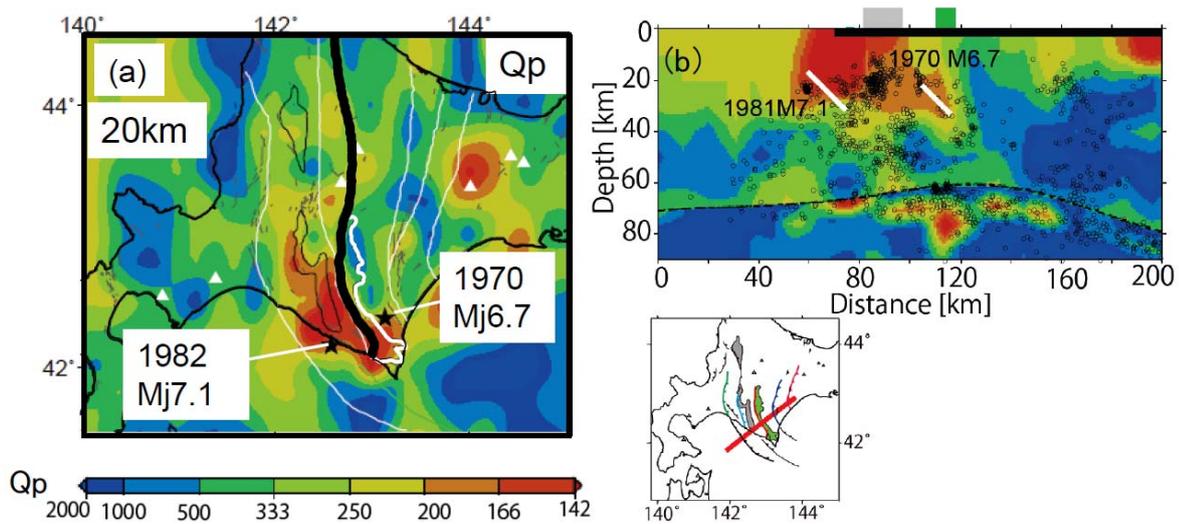


図17. 北海道下の地震波減衰構造と地震活動（東北大学 [課題番号：1208]）。推定された Q_p 構造の (a) 深さ20kmの水平断面および (b) 鉛直断面。(a)の白色細線は地質境界を示す。(b)上端の黒太線、緑矩形および灰色矩形は、それぞれ陸域、日高変成帯および神居古潭変成帯の位置を示す。黒点線および黒丸は、スラブ表面の位置 (Kita et al., 2010) と地震活動を示す。

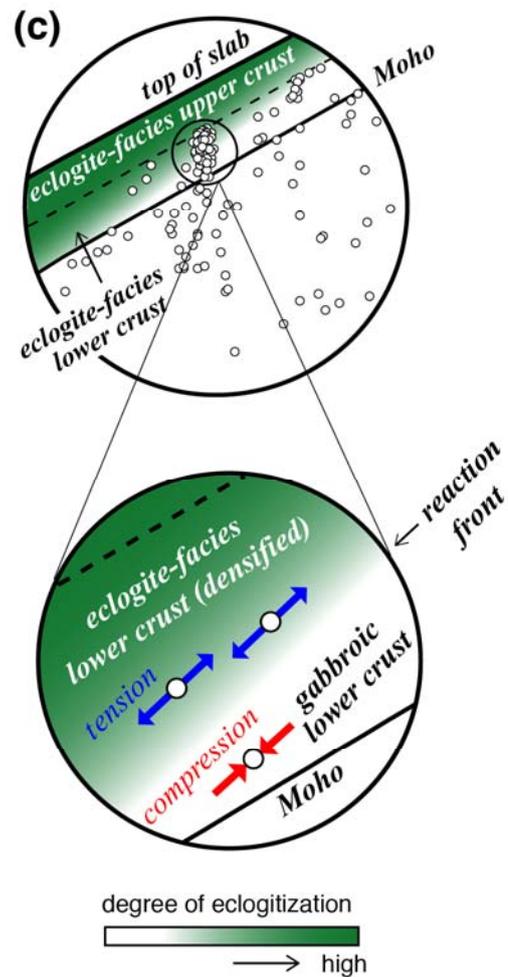
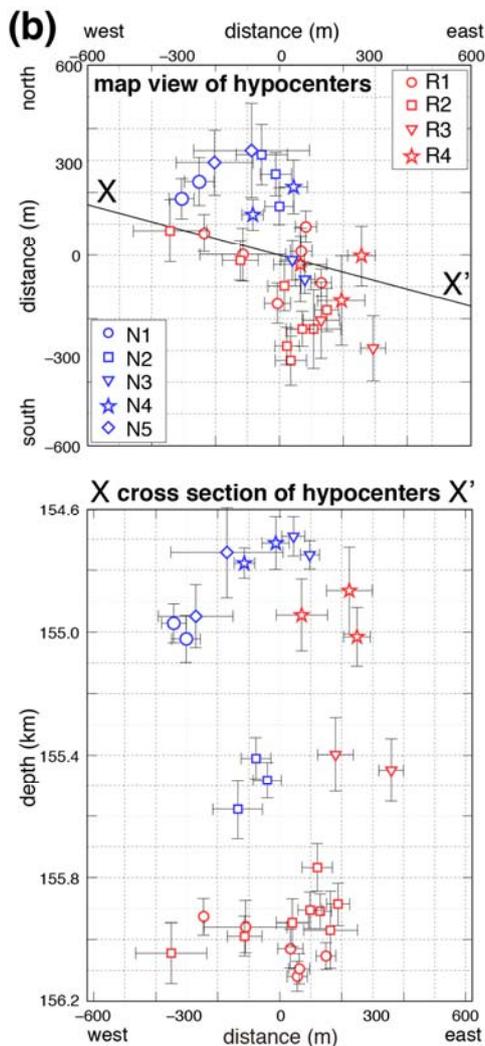
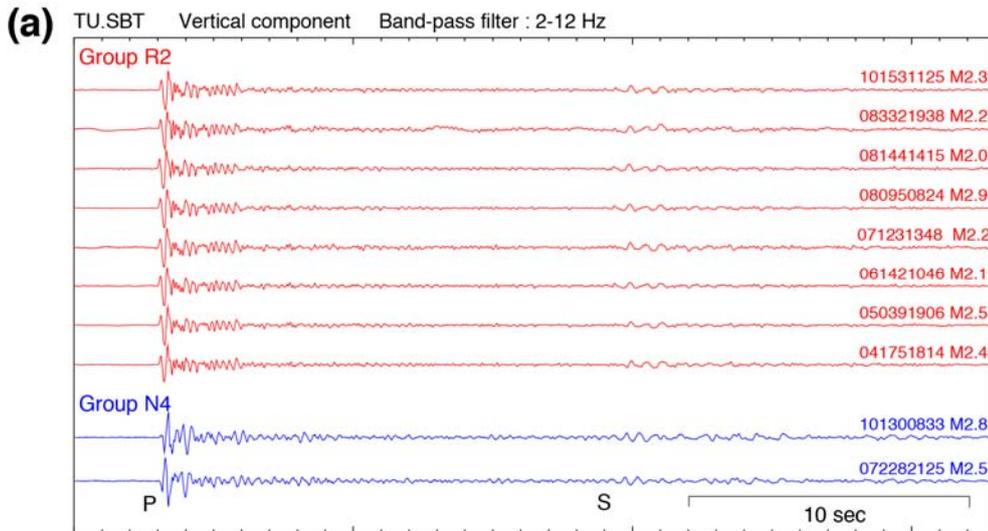


図18. 新発田の下のスラブ内地震クラスター（東北大学 [課題番号：1208]）。(a) 地震クラスター直上の観測点で観測された地震波形例。赤が逆断層地震、青が正断層地震（以下同じ）。(b) 再決定された震源分布。シンボルは波形の相似性で分類した9つのグループに対応。(c) 解釈図。エクロジャイト化により、反応フロントの浅部に引張場、深部に圧縮場が形成される。